



JACET-Chubu Newsletter

一般社団法人 大学英語教育学会中部支部 No. 47

2021年度中部支部大会報告 —新時代に必要な 英語コミュニケーション能力—

支部長 今井 隆夫
(南山大学)

昨年度(2020年度)の支部大会は、コロナ禍における混乱の中、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から対面での開催を見送ることとなり、代わって、9月12日にオンラインでの支部大会が初めて開催されました。今年度、2021年度は、引き続き Zoom による同

時双方向通信型のオンラインでの支部大会の第2回目を6月12日(土)に開催しました。今回は、コロナ禍の対策はもちろん、コロナ禍で得たプラスの面を生かした大会となるように執行部および研究企画委員で考えての開催としました。

具体的には、海外からの著名な研究者に講演をお願いすることは、オンラインだからこそ、対面の場合よりも容易に実現できることかと思えます。この点を生かし、認知言語学の英語学習への応用で著名な、Dr. Jeannette Littlemore(英国バーミンガム大学教授)をお招きし、“What drives the creative use of metaphor and metonymy, and why does this matter to language learners?”というテーマで、比喩表現の理解と英語教育のお話をさせていただきました。

さらに、Littlemore先生の講演を受けて、シンポジウムでは、「新時代に必要な英語コミュニケーション能力：認知言語学からの提言」をテーマに、日本の認知言語学の第一人者のお一人である山梨正明先生(関西外国語大学教授・京都大学名誉教授)と新進気鋭の認知言語学者である有蘭智美先生(名古屋学院大学准教授)をお招きし、また、私がコーディネーターを務め、認知言語学を生かした英語の学習と教育についてのシンポジウムを開催しました。

中部支部では、支部大会の後も、Zoomによる講演会、定例研究会を開催しておりますが、1つのZoomリンクでブレイクアウトルームを活用し、複数の部屋で研究発表を実施することも定例研究会では、試みました。しかし、Zoomによる研究発表で、失われたことの1つは、参加者同士が自由に個人レベルで話し合

目次

2021年度中部支部大会報告 —新時代に必要な英語コミュニケーション能力— 今井隆夫	1頁
講演会報告 1 Jeannette Littlemore 氏 “What drives the creative use of metaphor and metonymy, and why does this matter to language learners?” 大森裕實	2頁
講演会報告 2 John Shillaw 氏 “A life in language assessment” 三上仁志	3頁
講演会報告 3 池田佳子氏 「国際教育のゲートウェイとしての COIL」 藤原康弘	4頁
研究会報告 多文化共生と英語教育 小宮富子	6頁
事務局より	7頁

える機会です。学会という場所では、そこで出会った方々と個人的に話ができることは重要な要素の一つと考えます。Zoom における開催でも、この点を何とか解決できないものかと現在、考えております。2022 年度の支部大会も、6 月 4 日(土)(予定)に Zoom による開催が決定しています。執行部と研究企画委員で、今年よりも充実した会となるように考えていきたいと思っておりますので、引き続き、ご支援を賜りたく存じます。

講演会報告 I

中部支部 2021 年度支部大会特別講演

“What drives the creative use of metaphor and metonymy, and why does this matter to language learners?”

Jeannette Littlemore
(英国バーミンガム大学教授)

2021 年 6 月 12 日

[Zoom 開催]

JACET 中部支部 2021 年度の第 36 回大会の講演講師として招聘した J. リトルモア教授は、*Applying Cognitive Linguistics to Second Language Learning and Teaching* (2009)、*Metonymy* (2015)、*Metaphors in the Mind* (2019) をはじめ多くの学術的著作でつとに知られた研究者であり、その研究射程に認知意味論(認知言語

学)の言語教育への応用が意識されていることが同教授の卓立した特徴を形造っている。

本講演は、「メタファー(隠喩)及びメトニミー(換喩)とは何か」「それはどのようなものだと理解されているのか」「それはどのように産出されるのか」「それは国際的広告の脈絡で理解されるか」「果たして学習者にメタファーを教えることが可能か」という 5 つの問いに解を見出す実証主義的試みを通して、精力的かつ明晰に語られ、私達の蒙を啓くものであった。

私達の言語表現が隠喩や換喩によって豊かで生産的なものになっているという言語学的分析の嚆矢は Lakoff & Johnson (1980) *Metaphors We Live By* であつたと思うが、最近ではその理解はかなりの程度まで進んできている。“The ham sandwich is waiting for his check” はよく引用される換喩であり、“White House”(日本語なら「永田町」「霞が関」が類似例)は「確立換喩」であると言える。リトルモア教授はさらに一步進んで、「創造的隠喩」が映画のレビューや時事的記事に見受けられることを指摘するが、それは言語コミュニケーションにおけるメタファー及びメトニミーの生産性の高さを明示するものである。しかし、同教授の挙げる“Hit the Hillary”(= to press the delete key) のような事例は第二言語としての英語学習者にとっては難解であることは指摘しておかねばならない。さらに、“He has to be plutoed as soon as possible”を理解するには、太陽系の 9 惑星から冥王星が除外された科学的情報が基礎

 成美堂 2022 年度 新刊のご案内		〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-22 TEL 03-3291-2261 / FAX 03-3293-5490
Complete Communication Book 1 -Basic-.....2,530 円(税込) Complete Communication Book 2 -Intermediate- ..2,530 円(税込) Live Escalate Book 3: Summit..... 2,750 円(税込) Reading Palette Red -Basic-..... 2,090 円(税込) Reading Palette Green -Pre-Intermediate- 2,090 円(税込) Science Stream..... 2,090 円(税込) Strategic Reading for Global Information..... 2,090 円(税込) Global Pathways..... 2,090 円(税込) Good Grammar, Better Communication..... 2,090 円(税込)	AFP World News Report 6..... 2,750 円(税込) Meet the World 2022 -English through Newspapers- 2,200 円(税込) A COMMUNICATIVE APPROACH TO THE TOEIC® L&R TEST Book 1: Elementary..... 2,420 円(税込) BEST PRACTICE FOR THE TOEIC® L&R TEST -Intermediate-..... 2,750 円(税込) Understanding the World Today..... 2,090 円(税込) Globalization: The Future of Japan and the World 1,760 円(税込)	 SEIBIDO URL: https://www.seibido.co.jp e-mail: seibido@seibido.co.jp

知識として言語使用者の頭の中に共有されていなければ困難を伴うことに相違ないが、アメリカ政治社会に特化した Hillary 換喩よりは「近接性」をイメージしやすいという点で、「偶発換喩」にも定着度に濃淡があるということになる。

また、メタファー及びメトニミーの英語習得への応用を考える際に、「確立隠喩」が他言語使用者における「創造的意味解釈」を許す点から、その創造性の裏返しとも言うべき困難さを呈していることを見逃すことはできない。“It stems from government policy ⇒ It’s clearly different from government policy”のような事例に見受けられる誤解釈に関して、同教授の調査において、41%の隠喩に困難を感じ、50.6%の隠喩にしか説明を与えることができず、4.2%の学生しかそうした問題点に気づいていない結果が出たことは極めて示唆的である。その問題は「確立換喩」においても同様である。しかし、その困難さは第一言語の文化知識によって払拭される場合も少なくない——“The Suits began to appear from their conferences”の日本人学習者の理解度は76.5%に及ぶ。こうした問題点があるにもかかわらず、留学生のライティングにおける隠喩の使用率もCEFRレベルが上になるにつれて(A2⇒C2)増加し、誤用法はそれに反比例して減少する傾向にあることがドイツ人学生に対する調査から明らかになっている。

さらに、国際的広告の脈絡においては、多用されるメタファーの理解に、受け手の言語文化が反映した結果、広告メッセージの解釈に差異のあることが認められる。例えば、炭酸飲料水 7-up の広告コピー“Now 100% Natural”は、英語話者の場合、スペイン語や中国語話者よりも“healthy”であることをイメージさせる一方で、スペイン語話者の場合、英語や中国語話者よりも“sweet”であることをイメージさせる。

このように、メタファー及びメトニミーは一筋縄では捉えることのできない存在ではあるが、日常的言語表現に多々使用され、言語表現を

豊かにし、コミュニケーションの円滑化を促す重要な役割を担っていると言える。第二言語／外国語としての英語学習が言語コミュニケーションに資するためのものであると定義するならば、これらを教えないわけにはいかないということになる。できるだけ多くの事例を提示して、イメージ・スキーマ(経験と理解を組織化するための構造)を学習者に意識させ、適正に構築させる方法はどうあるべきかを考える好い契機となった。

大森裕實(愛知県立大学)

講演会報告 2

中部支部 2021 年度講演会

“A life in language assessment”

John Shillaw (南山大学教授)

2021 年 10 月 30 日

[Zoom 開催]

John Shillaw 先生(以下、Shillaw 先生)は、複数の言語(英語)テストの開発に携わってきた。講演では、Shillaw 先生が、これまでの歩みを振り返りつつ、日本における今後の言語アセスメントのあり方について提言を行った。

筑波大学での取り組み

Shillaw 先生は、項目応答理論(Item response theory)を学んだ後、筑波大学で英語の単位認定テストの開発に携わった。ラッシュモデルを使用してテスト開発を行い、開発したテストの併存的妥当性を検証した。この時期に大友賢二先生と共に Lang Testing Research Colloquium を筑波大学で開催したことが、日本言語テスト学会の発足につながった。

波及効果の妥当性(Consequential validity)への関心

Messick(1989)などの影響から、世界的に、テストの倫理的(Ethical)な側面や、テストの存在が学校教育に与える影響(ウオッシュバツ

ク効果)に注目が集まっていった。このような背景を反映して、Common European Framework of Reference for Languages の理論的な整理が進むなど、言語テストの世界も変化していった。Shillaw 先生も、この時期に「言語アセスメントを専門としている身として、どうすればテストをより良いものにできるのか?」というテーマへの関心を強めていった。

南山大学での取り組み

南山大学に着任後、Shillaw 先生は、クラス分けを目的とした英語テストや入試問題の開発に携わった。Shillaw 先生の着任時、英語の入試問題を作成するためのガイドラインは、存在しなかった。テスト項目については、教員が、授業や研究の合間に、時間的な余裕のない状況で作成していた。また、テスト項目の内容的な見直しも行われていなかった。このような状況を改善するため、Shillaw 先生は、テスト作成・運用のためのガイドラインを整備した。このような取り組みの結果、南山大学の英語入試は、現在、塾や予備校からも高い評価を得るようになった。

今後の言語アセスメント

現在のところ、中学校と高校の英語の学習指導要領には、言語アセスメントに関する言及がない。また、英語スピーキングの指導を推奨している現在でも、その評価方法は、教員に一任されている。このような状況は、改善される必要がある。英語能力の評価に民間試験を用いると言う案もあるが、妥当性・信頼性・実用

性などの面から見て、それは、解決策とは言えない。日本における言語アセスメントを良いものとするには、「どのような人材が、テストを作るべきなのか」について考える必要がある。言語の教育・評価に特化した組織や部署が作られることで、望ましいウォッシュバック効果を生むよう、専門家が、言語テストの中身を精査することが可能となる。これに加えて、教師のための言語アセスメント研修を充実させること、教育現場の声をテストに反映することも、重要な課題である。

三上仁志(中部大学)

講演会報告 3

中部支部 2021 年度講演会

「国際教育のゲートウェイとしての COIL」

池田佳子(関西大学教授)

2021 年 10 月 30 日

[Zoom 開催]

2020 年 1 月、日本で初めてのコロナ感染者が確認されてより、国際教育の主たる事業であった海外留学は停止された。2021 年秋、本原稿を執筆している際には、世界各地でのワクチン接種の進行に応じて、徐々に一部の留学プログラムが開始されつつある。しかしながら、まだ新型コロナの情報、各国および関係各所の状況を睨みながら、慎重に検討を重ねているのが多くの大学の現状であろう。

海外留学が滞る中、オンラインによる国際交

VELC Test[®] Online [ベルクテスト・オンライン]

Visualizing English Language Competency Test Online

VELC テストにスマホ、タブレット、PC で受験可能なオンライン版が登場しました。
是非、デモ版をご体験ください。



詳しくはこちら

VELC 研究会事務局 (株式会社金星堂内)
東京都千代田区神田神保町 3-21 (〒101-0051)
電話 03-3263-3828 / FAX 03-3263-0716
e-mail info@velctest.org <https://www.velctest.org/>

流プログラムは急激に増加してきた。校種を問わず、姉妹校などを繋ぎ、さまざまなテーマについてディスカッションを行うなどの授業やイベントなどが行われている。そのような最中、関西大学の池田佳子氏による本講演が行われた。非常にタイムリーなトピックである。

池田氏は関西大学の Institute for Innovative Global Education (IIGE) に所属され、コロナ禍が始まるよりずっと前の2014年より、オンラインの国際協同学習 (Collaborative Online International Learning : COIL) を推進されてきた。氏によると、当時の日本において先駆けであったらしい。講演内容を拝聴すると、今なお、先駆的な取り組みと受け取った聴衆が多かったのではないだろうか。

ご講演では、COIL の基本的な説明、言語学習に焦点を当てた COIL、そしていくつかの具体的な COIL の事例が紹介された。COIL は、本来は言語教育に主眼をおいている訳ではなく、日本の大学を海外大学や企業と ICT 技術で繋ぎ、何らかのプロジェクトを共同で行っていく中で、「学び」を発生させることが狙いである。

たとえばスイスの大学との COIL では、スイス側はサービス・デザインとサービス・マネジメント、日本側は日本でのマーケティングについて話し合いを行い、最終的にはオンライン・ポスターセッションを行うというものである。いわゆる「教室」の中を飛び出し、何らかのプロジェクトを行いながら「学び」を深めていく。

それゆえに、氏は COIL は、オンライン留学とは異なると考えた方がよいと指摘する。ホームはそれぞれにある状況で、立場が異なるものたちがオンライン上で行う共同学習である。本来はなかなか行くことができないエジプトやミャンマーなどの諸国の人間たちをつなぎ、SDGs などの国際的な問題について意見を交換することが比較的容易にできる。もちろん学事や時差などの時間的制約など、マネジメントしていくことは大変だろうが、学生にもたらされる学びは大きいものであろう。

報告者は COIL は国際英語論に基づく言語教育と大変相性がよいことに関心を抱いている。COIL は本来的に言語教育が主目的ではないが、ELF 的な教育実践を考えていく上で、必須のプラットフォームになるのではないか。こちらは共通語として日本語で行ったとしても、多／超言語主義的な価値観の醸成を図れるだろう。

インターネット上で、COIL に参画したい大学のマッチングを行う場もあるとのこと。もし COIL に参画したいのであれば、ぜひそのサービスを確認して欲しい。今後、COIL の分野は、仮にコロナが完全に収束したとしても、広まることは間違いない。大変示唆に富む内容であった。

藤原康弘 (名城大学)

新刊英語テキスト ※期間限定全ページ公開中

SANSHUSHA 〒 150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-2-22
TEL 03-3405-4511 <https://www.sanshusha.co.jp>

研究会報告

多文化共生と英語教育

Multicultural Coexistence and English Education

多文化共生と英語教育研究会は「グローバル化した現代社会のニーズに直結した視点で日本の大学英語教育を捉えなおす」という趣旨のもと 2014 年 4 月に設置された研究会です。2021 年度は、本研究会にとっても英語教育の地殻変動を感じる年だったと思います。現代社会の変化から英語教育を捉えなおすことの切実さをひしひしと感じた年でした。

「創造社会」と呼ばれる Society5.0 では、AI と人間の相互乗り入れが必須となり、これまでの価値観が色褪せていくとともに、「正解」が見いだせない社会の中で、新しい価値を生み出し続ける姿勢が求められていると言われています。「創造的」でない事業が退場を告知される時代です。文系と理系の区別も曖昧になりそうです。英語教育に関しても、2017 年以降、自動翻訳や自動通訳ソフトの実用性が飛躍的に高まったことにより、自動翻訳・通訳と共存する英語教育の展開を考える必要性が出てきています。自分で英語を話さなければビジネスにならなかった時代から、より正確で簡便に自動翻訳・通訳が使える時代になりつつあることは、英語教育にとって脅威になるかもしれませんが、一方で、大チャンスになる可能性もあります。自動翻訳や自動通訳を「足場架け」として活用することで、より自分らしい英語表現を駆使できる学生が増加すると思われるからです。

本研究会では「Diversity &Inclusion と英語教育」を 2021 年度の研究テーマとし、8 月の第 60 回 JACET 国際大会では「Society 5.0 時代の英語教育への提言」と題したシンポジウムを行いました。AI 化の進展で激変する Society5.0 時代を生き抜くための真の国際人を育成するためには、英語スキルの獲得だけでなく Diversity&Inclusion や SDGs などの基底にある公共財や地球市民共通の価値への気づきを高める国際理解

教育が益々重要になっていると考えるからです。また、学生の英語意識と社会認識 (SDGs、多文化共生、多言語社会と英語、ジェンダー論、AI 時代の英語など) に関する 6 大学合同の調査を行い、その調査結果とそこから引き出した教育提言をまとめる活動も行いました。2022 年度も引き続き、現代的課題を自分ごととして受け止めて国際社会に発信し行動できる学生を育てるために大学英語教育が何をなすうのか、今後の教育実践につなぐための方法を模索していきたいと思っています。

小宮富子 (岡崎女子短期大学)

掲示板

『JACET 中部支部紀要』第 20 号への掲載論文の投稿 (学術論文、研究ノート、実践報告、書評) を募集します。奮ってご応募ください。

締切: 2022 年 9 月 20 日
刊行予定: 2022 年 12 月
掲載料: 刷り上がり 1 ページにつき、
1,000 円
問合せ: JACET 中部支部事務局

投稿方法等の詳細については中部支部ホームページでご確認ください。

中部支部紀要編集委員会

事務局より

◆ 新入会員のご紹介

2021年6月から2021年12月までの中部支部所属新入会員は以下の方々です。(敬称略、入会順)

永倉 由里(常葉大学)
伊藤 創(関西国際大学)
黄 大网(Ningbo University)
瀧澤 典子(上越教育大学)
ハーモンド マーク(金沢大学)
小椋 博文(大垣女子短期大学)
ロジャース ジェイムス(名城大学)
Morrish, Jaime(杉山女学園大学)
グレイ ケリー(富山大学【非常勤】)
溝口 夏歩(岐阜大学【大学院生】)
アルシャフスカヤ エカテリナ(静岡県立大学)
藤森 敦之(静岡県立大学)
鎌倉 義士(愛知大学)

◆ 2021年度第2回支部総会報告

12月11日に開催された第2回JACET中部支部総会で2022年度事業計画及び予算案・人事案が了承されました。

◆ 2022年度中部支部役員(敬称略)

顧問： 倉橋洋子(東海学園大学名誉教授)
田中春美(南山大学名誉教授)
吉川寛(中京大学)
理事・支部長：今井隆夫(南山大学)
副支部長：安達理恵(椋山女学園大学)
事務局幹事：吉川りさ(名古屋工業大学)
事務局幹事補佐：大瀧綾乃(静岡大学)
幹事支部会計担当：藤田賢(愛知学院大学)
支部研究企画委員(50音順)
安達理恵(椋山女学園大学)、石川有香(名古屋工業大学)、今井隆夫(南山大学)、大石晴美(岐阜聖徳学園大学)、大瀧綾乃(静岡大学)、大森裕實(愛知県立大学)、岡戸浩子(名城大学)、木村友保(名古屋外国語大名誉教授)、倉橋洋子(東海学園大名誉教授)、小宮富子

(岡崎女子短期大学)、佐藤雄大(名古屋外国語大学)、塩澤 正(中部大学)、下内 充(中部学院大学)、白畑知彦(静岡大学)、杉浦正利(名古屋大学)、鈴木達也(南山大学)、地村みゆき(愛知大学)、藤田 賢(愛知学院大学)、藤原康弘(名城大学)、三上仁志(中部大学)、吉川 寛(中京大学)、吉川りさ(名古屋工業大学)、梁 志鋭(豊橋技術科学大学)

◆ 2022年度JACET国際大会のご案内

第61回国際大会は2022年8月24日(水)~26日(金)にオンラインで開催されます。大会テーマ
「デジタルトランスフォーメーションのグローバルな進展における言語文化教育の再設計」
“ Redesigning of Language and Culture Education in the Global Process of Digital Transformation”
詳細はJACET大会ホームページをご覧ください。

◆ 2022年度支部大会のお知らせ

第37回中部支部大会を2022年6月4日(土)にオンラインにて開催いたします。詳細は中部支部ホームページをご覧ください。

◆ 住所変更届提出のお願い

支部会員のみなさまに、紀要やNewsletterなどの郵便物をお届けできない事例が増えていきます。お手数ですが、転居の際には、JACET本部事務局と中部支部事務局の両方に、住所変更届をご提出ください。詳細は、以下のサイトをご覧ください。

・JACET 中部支部ホームページ
<http://www.jacet-chubu.org/>

◆ ニュースレターは会員の皆様のフォーラムです。ご意見、ご要望等は事務局までメールでお送りください。投稿も歓迎いたします。なお、メール件名は【JACET 中部】とお書き添えください。

JACET 中部支部事務局

〒466-855 愛知県名古屋市昭和区

御器所町

名古屋工業大学 吉川りさ研究室内

E-mail: yoshikawa.lisa@nitech.ac.jp

JACET 中部支部ホームページ

<http://www.jacet-chubu.org/>

JACET-Chubu Newsletter No. 47

2021年12月25日発行

発行者：一般社団法人 大学英語教育学会

中部支部（代表）今井隆夫

編集者：大瀧綾乃、岡戸浩子、

吉川りさ